

「日頃の親子のかかわり」尺度の簡易版作成の試み

萩生田伸子 埼玉大学教育学部教育心理カウンセリング講座

沢崎俊之 埼玉大学教育学部教育心理カウンセリング講座

キーワード: 親子のかかわり尺度、係数、短縮版

1. はじめに

沢崎(2010)は、虐待から子どもを守るという観点から親と子の日頃の関係、虐待に対する親の認識、子育てに関する親の考え等について大規模な調査データの分析をおこなっている。その調査内容は、フェイスシート、「日頃の親子の関わりを問う項目」36項目、「虐待についての認識を問う項目」17項目、「親の子育て観を問う項目」11項目、および、「子どもの意識」9項目からなり、子どもの虐待とそれに関連する事項について複数の視点からとらえることを目指している。このうち、「日頃の親子の関わりを問う項目」の収集は、子育て中の母親らと面談をおこない、子どもに対して親が取る行動にはどのようなものがあるのかについて聞き取るという方法を中心におこなわれたものであり、養育者の実体験を反映した内容となっている。

この「日頃の親子の関わりを問う項目」36項目について、沢崎(2010)は主成分解、バリマックス回転をおこない、固有値1.0以上という基準によって『親からの指示・叱責・説得』『共感』『コミュニケーションの機会』『親子の話し合い』『身近な相談相手』『宿題・勉強・ゲーム』『親子のゆとり』『夫婦の協力』『子どもの育ちへの不安・甘やかし』の9因子解を採用している。この点については因子数が多すぎるという見解もあると思われるが、親子の関わり合いには多様な側面があることを考慮するならば、多めの因子を想定することによって多くの視点を提供でき、養育者に対して、自らと子どもとの日常的な関わり方にどのような特徴があるのかについて振り返るきっかけになると考えられる。そこで本稿では、この9因

子構造を生かして、各因子での項目数を減らしていくことを考える。つまり、子育て中の母親らが短時間で回答できる、手軽なチェックリストとして活用するためには、項目数の削減が必須であると考えられるので、「日頃の親子の関わりを問う項目」36項目について、主に係数の大きさに着目して項目数を半数程度に削減することを試みる。

2. 方法

全国地域活動連絡協議会が収集したデータの再分析をおこなう。データの概要については沢崎(2010)に記載のあるとおりだが、簡潔にまとめると、調査は全国の母親クラブを通じて小学校4年生から中学校3年生の子どもがいる母親に依頼をする形式でおこなわれ、計5613名から回答を得ている。なお、親と子どもとの関わりについては、第一子と第二子とでは異なっていると考えられるので、調査協力者に複数の子どもがいる場合は第四子までそれぞれの子どものごとに回答をするように依頼したので、子どもの年齢は0歳から30歳代の広範囲にわたったが、ここでは子どもの学校種が小学校1年生から中学校3年生に該当する計10323名のデータを分析対象とした。

3. 結果

3-1 係数に基づいた項目の選択

まず、各因子ごとに係数に基づいて項目を削減した結果を示す。以下、因子名は原則

として沢崎(2010)の記載にしたがった。

<1. 親からの指示・叱責・説得>

『18.つまらないことで叱ることが多い』『19.「ああしなさい」「こうしなさい」と子どもによく言う』『20.子どもについて手が出てしまうときがある』『21.子どもが親の言うことを聞かず苦労することが多い』『22.子どもの考えや意見がまちがっていると思うときには、親の考えや判断をはっきり伝えて説得する』の5項目からなる。これらの項目を一つの尺度と見なした際の尺度得点の平均値は13.14(1項目あたりの平均得点は2.63。以下同様)、尺度得点の標準偏差は3.020、係数は.720であった。これらの中から2項目を残すとして、総当たりで係数を計算したところ(実際には項目間の相関が最大となる2項目を選択)、No.18とNo.19の項目の組み合わせで.752と最大になった。その際の尺度得点の平均値は5.59(2.80)、標準偏差は1.584であった。

<2. 共感>

『15.子どもの友達について子どもと話す』『23.子どものほうから話をする』『24.子どもとコミュニケーションがとれていると思う』『25.子どもをよくほめる』『27.子どもの気持ちがよくわかる』『28.子どもとのかかわりから、自分のことで気づかされることがある』『31.子どもの相手をするのは楽しい』の7項目からなる。尺度得点の平均値は23.14(3.31)、標準偏差は2.902、係数は.738であった。No.23とNo.24の項目を残した場合、係数は.717であり、尺度得点の平均値は6.95(3.48)、標準偏差は1.169であった。

<3. コミュニケーションの機会>

『1.子どもと一緒に食事をする』『2.食事をするときは、子どもといろいろなことをよく話す』『3.朝起きると、子どもと「おはよう」とあいさつする』『4.親子で楽しい時を過ごす時間がある』『5.休日に一緒にでかける』『7.一緒にテレビやビデオなどをみる』の6項目からなる。尺度得点の平均値は21.32(3.55)、標

準偏差は2.620、係数は.707であった。これらの中から2項目を抜き出した際に係数が最大になったのはNo.4とNo.5の組み合わせである。このとき尺度得点の平均値は6.76(3.38)、標準偏差は1.348であった。

<4. 親子の話し合い>

『9.服装のことで子どもと話す』『10.子どもの言葉づかいのことで子どもと話す』『11.携帯電話の使い方をめぐって子どもと話す』『14.将来や進路について子どもと話す』『16.自分の子どもの頃について子どもと話す』の5項目からなり、尺度得点の平均値は14.31(2.86)、標準偏差は3.044、係数は.663であった。

この中から2項目のみを残すのと想定するならば、No.9とNo.10の2項目で=.595(尺度得点の平均値は6.31(1項目あたりの平均値は3.16)、標準偏差は1.469)、No.11とNo.14ならば=.574(尺度得点の平均値は4.99(2.50)、標準偏差は1.739)であった。それ以外の組み合わせでは係数が0.5を超えることはなかった。

<5. 身近な相談相手>

『34.子どもの友人の親とは気軽に話をする』『35.子育てのことを気楽に話せる友人がいる』『36.子どものことで不安や心配なことがあっても、身近に相談する相手がいない』の3項目からなり、尺度の平均は10.44(3.48)、標準偏差は1.777、係数は.687であった。No.36の項目を除外すると係数は.701に上昇した。その際の尺度得点の平均値は6.91(3.16)、標準偏差は1.336であった。

<6. 宿題・勉強・ゲーム>

『6.子どもの宿題や勉強を一緒にする』『12.ゲームの使用時間などをめぐって子どもと話す』『13.宿題や勉強をめぐって子どもと話す』の3項目からなり、尺度の平均は8.67(2.89)、標準偏差は2.219、係数は.598であった。なお、No.6の項目を除外すると係数は.553に低下する。その際の尺度得点の平均値は6.15(3.08)、標準偏差は1.579であった。

<7. 親子のゆとり>

当初より『8.子どもとゆっくり過ごす時間がない』『17.子どもとゆっくり話す時間がない』の2項目のみからなっており、尺度の平均は5.64(2.82)、標準偏差は1.668、係数は.771であった。

<8. 夫婦の協力>

『32.こどものしつけでは夫婦の考えは一致している』『33.子どもに問題が起きたときには、夫婦でよく相談して対処する』の2項目からなり、尺度得点の平均値は6.43(3.22)、標準偏差は1.542、係数は.787であった。

<9. 子どもの育ちへの不安・甘やかし>

この因子は『26.子どもを甘やかしている』『29.子どものことで悩んでいる』『30.子どもがきちんと育っているか、気になる』の3項目からなり、尺度得点の平均値は7.53(2.51)、標準偏差は1.923、係数は.536であった。No.26の項目を除外すると係数は.687へと上昇した。その際の尺度得点の平均値は5.06(2.53)、標準偏差は1.638であった。

3-2 項目数削減前後の尺度得点の相関関係

項各因子にもともと含まれていた項目に基づいて計算した尺度得点と、2項目ずつに減らした後の尺度得点との相関係数を表1に示した。なお、欠測はペアワイズで除外をしたが、それでも観測数はどの因子でも9400を超えている。また『親子の話し合い』については、No.9とNo.10の項目を使用したケースとNo.11とNo.14の項目を使用したケースの両方を算出した。

いずれの因子においても、元の尺度得点と2項目のみから算出した尺度得点の相関係数は0.75を超えており、すべて1%水準で有意であった。なお、『親子のゆとり』と『夫婦の協力』の相関がそれぞれ1.0となっているが、これは当初より各因子が2項目から構成されており、項目の削減がおこなわれていないためである。

表1 項目数削減前後の尺度得点間相関

因子	元の項目数	相関係数
1. 親からの指示・叱責・説得	5	0.867
2. 共感	7	0.790
3. コミュニケーションの機会	6	0.849
4. 親子の話し合い(No.9,10)	5	0.775
4. 親子の話し合い(No.11,14)	5	0.812
5. 身近な相談相手	3	0.925
6. 宿題・勉強・ゲーム	3	0.893
7. 親子のゆとり	2	1.000
8. 夫婦の協力	2	1.000
9. 子どもの育ちへの不安・甘やかし	3	0.915

3-3 因子分析

各因子ごとに係数が最大となる2項目を抜き出した結果として18項目が選び出されたので、それらについて因子分析をおこなった。まず、沢崎(2010)が9因子を抽出した手続きを踏襲し、主成分法・バリマックス回転を適用し、第9主成分まで求めた結果を表2に、スクリープロットを図1に示す。なお固有値が1.0を超えるのは第6主成分までであった。そこで、どのような項目群が形成されたのかを確認するために第6主成分までを抽出し、回転をおこなったところ『共感』『コミュニケーションの機会』『親子の話し合い』に関する6項目、『親からの指示・叱責・説得』『宿題・勉強・ゲーム』に関する4項目、がそれぞれ一つにまとまった。そして『親子のゆとり』『夫婦の協力』『子どもの育ちへの不安・甘やかし』『身近な相談相手』についてはそれぞれの因子に属する2項目が集まるという結果になった。

因子分析の方法として一般的な最尤法もしくは最小二乗法を適用した場合、9因子解は不適解となったが、参考までに最尤法・プロマックス回転後のパターン行列および因子間相関を示す(表3、表4)。

表2 回転後の(主成分法・バリマックス回転)

	成分								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
33_子どもに問題が起こったときには、夫婦でよく相談して対処する	.894	.031	-.003	.071	.117	-.018	.033	.065	.028
32_子どものしつけでは夫婦の考えは一致している	.889	.041	-.042	.083	.091	-.091	.078	.019	.005
08_子どもとゆっくり過ごす時間がない	.033	.887	-.043	.046	.026	-.043	.143	.040	.033
17_子どもとゆっくり話をする時間がない	.039	.876	-.066	.133	.065	-.080	.103	.039	.015
18_つまらないことで叱ることが多い	-.047	-.086	.875	-.065	.007	.134	.042	.056	.085
19_「ああしなさい」「こうしなさい」と子どもによく言う	.000	-.028	.848	.040	.000	.167	.010	.050	.207
23_子どものほうから話をする	.036	.052	.041	.873	.077	-.039	.136	.140	.043
24_子どもとコミュニケーションがとれていると思う	.153	.160	-.083	.775	.130	-.135	.235	.089	.069
35_子育てのことを気楽に話せる友人がいる	.104	.059	-.012	.099	.863	-.046	.017	.062	.032
34_子どもの友人の親とは気軽に話しをする	.099	.029	.021	.074	.855	-.047	.112	.060	.056
30_子どもがきちんと育っているか、気になる	-.016	-.035	.129	-.025	-.025	.870	-.011	.049	.080
29_子どものことで悩んでいる	-.096	-.089	.158	-.121	-.072	.827	-.060	.000	.048
05_休日に一緒にでかける	.039	.110	.135	.120	.051	-.016	.850	.140	.097
04_親子で楽しい時を過ごす時間がある	.086	.173	-.085	.252	.098	-.063	.781	.109	.088
09_服装のことで子どもと話す	.055	.034	-.029	.121	.061	.011	.131	.869	-.027
10_子どもの言葉づかいのことで子どもと話す	.032	.050	.155	.097	.072	.044	.103	.744	.273
12_ゲームの使用時間などをめぐって子どもと話す	-.018	.022	.111	-.045	.042	.046	.102	.005	.879
13_宿題や勉強をめぐって子どもと話す	.063	.030	.193	.181	.053	.097	.068	.235	.701

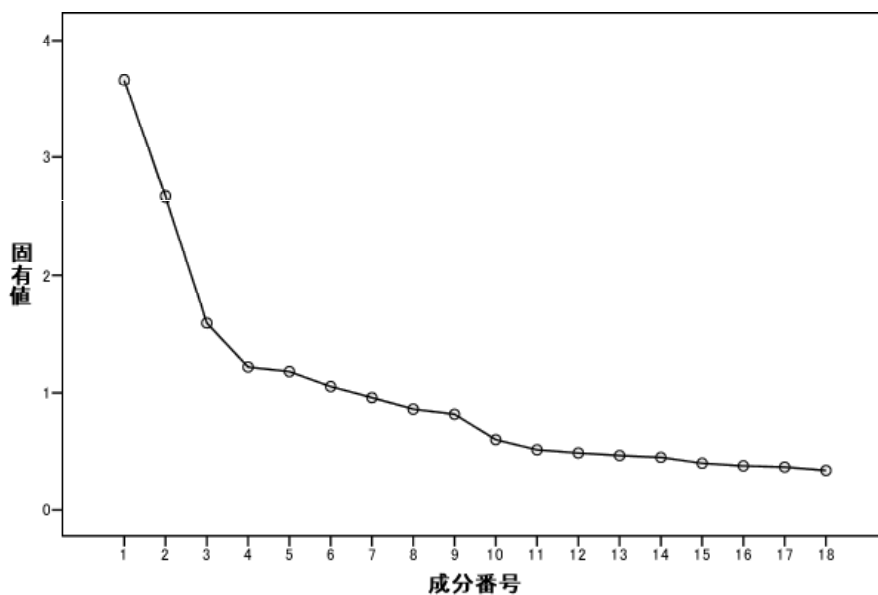


図1 スクリープロット

表3 パターン行列(最尤法・プロマックス回転)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
19_「ああしなさい」「こうしなさい」と子どもによく言う	1.011	.009	.038	.038	-.009	-.043	-.049	-.049	-.030
18_つまらないことで叱ることが多い	.585	-.021	-.064	-.071	.008	.068	.016	.013	.058
32_子どものしつけでは夫婦の考えは一致している	-.015	.920	-.005	-.011	-.030	-.009	-.006	-.033	.017
33_子どもに問題が起こったときには、夫婦でよく相談して対処する	.012	.705	.002	.001	.047	.015	-.001	.037	-.028
17_子どもとゆっくり話をする時間がない	.005	-.009	.860	.013	.014	-.004	-.017	.000	-.042
08_子どもとゆっくり過ごす時間がない	-.013	.007	.742	-.043	-.021	.013	.014	-.002	.047
24_子どもとコミュニケーションがとれていると思う	-.017	.005	-.008	1.026	-.012	.015	.001	-.068	-.050
23_子どものほうから話をする	.022	-.024	-.029	.511	.013	-.021	-.028	.124	.082
35_子育てのことを気楽に話せる友人がいる	-.007	-.019	.007	-.006	.890	.011	-.015	-.021	-.040
34_子どもの友人の親とは気軽に話しをする	.006	.040	-.017	.003	.598	-.020	.014	.015	.056
29_子どものことで悩んでいる	-.024	-.010	-.002	-.001	-.004	.832	-.021	-.041	-.003
30_子どもがきちんと育てているか、気になる	.037	.016	.012	.005	-.001	.635	.003	.037	.002
12_ゲームの使用時間などをめぐって子どもと話す	-.037	-.009	-.003	-.020	-.005	-.017	1.036	-.047	-.013
13_宿題や勉強をめぐって子どもと話す	.193	.035	.016	.080	.017	.054	.248	.225	.030
09_服装のことで子どもと話す	-.085	.005	-.010	-.005	-.016	-.020	-.108	.738	-.015
10_子どもの言葉づかいのことで子どもと話す	.053	-.008	.010	-.005	.006	.014	.071	.638	-.022
05_休日に一緒にでかける	.044	-.013	-.024	-.052	-.006	.007	-.018	-.033	.898
04_親子で楽しい時を過ごす時間がある	-.076	.015	.080	.176	.026	-.017	.016	.027	.500

表4 因子間相関(最尤法・プロマックス回転)

因子	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1	1.000	-.047	-.129	-.027	.026	.435	.380	.285	.141
2	-.047	1.000	.153	.307	.306	-.198	.039	.185	.208
3	-.129	.153	1.000	.375	.185	-.231	.074	.194	.389
4	-.027	.307	.375	1.000	.335	-.276	.128	.426	.520
5	.026	.306	.185	.335	1.000	-.160	.124	.282	.246
6	.435	-.198	-.231	-.276	-.160	1.000	.189	.100	-.105
7	.380	.039	.074	.128	.124	.189	1.000	.337	.257
8	.285	.185	.194	.426	.282	.100	.337	1.000	.505
9	.141	.208	.389	.520	.246	-.105	.257	.505	1.000

4. 考察

本稿では、親と子の日常的な関わりの有り様について手軽に利用できるチェックリストに採用する項目の候補の選出をおこなった。つまり、主に係数の大きさ(項目間相関の大きさ)を参照しながら沢崎(2010)の36項目9因子から各因子2項目ずつの計18項目を抜き出し、元尺度との関係を検討した。一つの事柄についてわずか2項目を用いて測定することが適切かについての議論はあろう。また、9つの因子から2項目ずつ選出した18項目について改めて単一の尺度とみなして因子分析をおこなったとしても、一般的な探索的因子分析では元の9因子構造の再現は難しく、この点をどう評価するかについても意見が分かれるかもしれない。しかし、親子の関わり合いの様相について多くの側面を簡単にチェックするという目的に対しては、測定できる領域が広く項目数が少ないというのはむしろ望ましい状況であるとも考えられる。

係数の大きさだけに着目して項目を削減した場合、大局として相関が高い項目が残ることになる。つまり、親と子どもの関係をまさに的確に表現していると考えられる内容であっても、項目の特性として他の項目とは相関をあまり持たない項目であれば機械的に除外されることになり、この点についても検討が必要である。たとえばそのような項目をさらに追加し、親子の関わりについて捉えることができる側面を増加させることも可能であろう。もちろん、そのことによって手軽さが失われる可能性も同時に存在する点には留意する必要がある。

短縮版尺度が元尺度の特徴を適切に反映しているかという観点からは、項目数を削減したことによって算出される尺度得点と本来の尺度の得点とが大幅に異なってくることは不適切である。しかし、本研究においては9つの因子すべてについて、元の尺度得点と2項目のみから算出した尺度得点の相関係数は0.7を超

えていた。この点では、各因子の内容を2つの項目で全体を代表させることに関して大きな問題はないと考えられる。

◀4. 親子の話し合い>尺度については、2項目を選択するという条件下では『9.服装のことで子どもと話す』『10.子どもの言葉づかいのことで子どもと話す』の組み合わせ、または『11.携帯電話の使い方をめぐって子どもと話す』『14.将来や進路について子どもと話す』の組み合わせでのみ係数が.50を超えている。係数の大きさからはどちらの組み合わせを選択すべきかの決定は難しいかもしれないが、元の尺度得点の再現性という観点からはNo.11とNo.14の方が望ましいと考えられる。しかし、項目の内容を見ると後者は小学校低学年の児童との間ではあまり話題にならない事柄と考えられる。この点からは、むしろ、チェックリストで使用する項目をどちらかに決めてしまうのではなく、子どもの年齢層によって使用する項目を変更する方が有用であると思われる。

項目数を減らした結果、各下位尺度の名称を変更した方が良いと思われるケースも生じている。たとえば『子どもの育ちへの不安・甘やかし』は子どもを甘やかすことに関する項目を除外するのであれば、『子どもの育ちへの不安』とするほうが適切であると思われる。『共感』も『子どもとのコミュニケーション』とするほうが良いかもしれない。

さらに、上述とは異なった観点から尺度の構造自体について再検討をおこなうことが望ましい可能性も考えられる。今回の分析対象としたのは「親子のかかわり」に関する項目と想定されているが、内容上は『子どもに対する働きかけやコミュニケーション』に関わる項目群と『親の置かれている状況』に関する項目群が混在しているようにも思われる。たとえば『夫婦の協力』『身近な相談相手』『子どもの育ちへの不安・甘やかし』などは、親が置か

れている状況を表現しており、それ以外の項目群が『子どもに対す働きかけやコミュニケーション』に関連していると考えられる。そうであれば、「親子のかかわり」という1つの尺度の枠ではなく、2つの尺度として扱うことによって、新たな知見が得られるかもしれない。

今後、本稿では取り上げなかった他の尺度、すなわち「虐待についての認識を問う項目」、「親の子育て観を問う項目」、「子どもの意識」等と「親子の関わり」尺度との関係について検討を行っていく予定であるが、他の尺度についても質問項目の取捨選択が必要であるかもしれない。たとえば「子どもの意識」9項目については、沢崎(2010)において『居心地』と『親への相談』の2因子構造を想定している。しかし、『K7 親から叱られることが多い』という一項目を除外した8項目の係数は0.83程度になり、「家庭の雰囲気良さ」に関連した1因子構造と考えることも出来そうである。これらについての検討結果は次稿以降において紹介をおこなう予定である。

謝辞

本稿で使用したデータは独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者年金」助成事業の助成を得て、全国地域活動連絡協議会が収集した。また、調査には各地の母親クラブおよび関係のみなさまのご協力を頂いた。ここに記し感謝を申し上げる。

引用文献・参考文献

沢崎俊之(2010) 母親クラブによる“地域の安全・安心対策と児童虐待防止”事業報告書 3章 児童虐待予防 63-89 全国地域活動連絡協議会
中村攻・沢崎俊之(監修)(2010) 母親クラブによる“地域の安全・安心対策と児童虐待防止”全国地域活動連絡協議会(母親クラブ)

(2011年 4月 28日提出)

(2011年 5月 20日受理)

Making of the Shortened Version of a Child-Parent Relationship Scale

HAGIUDA, Nobuko

Faculty of Education, Saitama University

SAWAZAKI, Toshiyuki

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

Sawazaki (2010) developed the child-parent relationship scale. It consists of nine factors, including 36 items. In order to make it easy-to-use, we re-analyzed Sawazaki's (2010) data and reduced the number of items by half, mainly referring to Cronbach's alpha. Then we carried out comparison of original scale and a shortened version. The correlation coefficients between them was high enough. And in principal component analysis, the same principal components as an original scales appeared.

Key Words : child-parent relationship scale, Cronbach's alpha, shortened version